

Standing at a Bar

—『The Sympathizer』から探る言葉のパワーと私の手記—

文学部文学科英米文学専攻

こさき なつき
小先 夏生

この卒業論文は、普通の卒業論文ではない。私はここで、自分自身のことを書き記したい。4年の後期、2022年9月の半ば、担当教員（Gayle K. Sato）と卒論の打ち合わせをした後、私の父方の亡き祖母が45年の歴史あるバーのママであったこと、そして亡き祖父が直木賞作家であったことを担当教員に話してしまった。その時には、まだ、卒業論文ではヴェトナム系アメリカ人作家 Viet Thanh Nguyen の作品『The Sympathizer』を取り上げ、アイデンティティをテーマに作品を読み解く卒論を書くことを予定していた。ヴェトナム戦争後を時代軸として描かれたその小説の名前のない主人公は、フランス系ヴェトナム人であり、はじめ北ヴェトナムのスパイとして南ヴェトナムに潜り込み、その後、資本主義国家のアメリカで移民として生きる社会主義者であった。彼は、アメリカからヴェトナムに帰郷する途中、ラオスで囚われ、教育キャンプに収容されてしまう。この作品は、その教育キャンプの独房で、その青年が、司令官と呼ばれる共産主義の同士に向けて書いた告白文を擬したものである。この文章を通して主人公は、二項対立の環境においてスパイであるにもかかわらずどちらの側にも同情してしまうという本音を吐露して「自分とは何者なのか」という質問を自身に問いかけている。私は、1年間留年をすることで2021年の8月からフランスのストラスブールで1年間の交換留学プログラムに参加し、帰国後は祖母が働いていたバーと同じ場所でアルバイトをしながら就職活動を行なった。2年間に渡った大学4年生としての生活では、自分について考える機会を多く持つことができた。こうした、自身のアイデンティティについて考え込んでいた時期に、このような主人公の告白文を読み、私自身の身の上話を思いがけず担当教員に話したことは自然な流れであった。私の祖父母に関するバックグラウンドの話聴き終えた担当教員から、「それについて卒業論文を書いたら良いのではないか」という意見を貰ったことで、自分が卒業論文で一番書きたいテーマを見つけることができたのだ。その日から、私たちの卒論会議が変化した。『The Sympathizer』を分析することではなく、この作品の主人公が告白文を通して行ったように、Nguyen と彼の作品『The Sympathizer』の主人公の告白文を頼りに、自分のアイデンティティを確立していくまでの経緯と葛藤についての私自身の告白文を、ジャーナリストでありお客さんに伝説的なバーのママと言われた祖母の存在、実際に存在した殺人者たちについてのノンフィクション小説を書く作家の祖父の存在を手がかりとして書いていくことが主目的となっていたのである。そして私はこの手記を通して、言葉の持つパワーは流動的で、自分次第でポジティブにもネガティブにもなり得ることを伝えたい。

5年間の学生生活で、居酒屋や塾講師、コワーキングスペースのフロント業務等々数々のアルバイトを経験してきたが、その中でも「HALO」という新宿のゴールデン街にあるバーで働いた経験が、私のルーツを知る基盤となり心の成長に最も影響を及ぼした経験として一番印象に残っている。まずはゴールデン街という場所について紹介したい。新宿ゴールデン街商業組合、新宿三光商店街振興組合によって作成されたホームページによると、新宿のゴールデン街という場所は、西洋化された新宿の建物群の中に一つのお店あたり敷地は3～5坪程度しかない小さなバーが280店舗もひしめき合っている、約6500平方メートルしかないエリアのことを言う。さらにその歴史は太平洋戦争後に繰り広げられた闇市を発端とし、バブル期の地上げや再開発と戦いながら現在までその面影が残っていると紹介されている

(新宿ゴールデン街商業組合、新宿三光商店街振興組合)。私はその場所を歩くたびに、映画の中でしか見たことの無い昭和時代にタイムスリップしたかのような気持ちになる。そんな街の一角にあるバーのHALOには、私が20歳の誕生日を迎えた1週間後である2019年の6月に父にはじめて連れて行かれた。そこは私の父方の祖母が1973年から2018年までの45年間「花の木」という名のバーを構えていた場所である。祖母が2018年の1月に動脈瘤破裂で亡くなった後、彼女の息子である私の父とその場所で新しいお店を構えたい人たちとの話し合いが行われ、現在のオーナーを含む4人のメンバーがその場所でHALOという新しい看板を掲げたのだ。現オーナーが私の父と話し合いを行った際に言われたというその場所を引き継ぐことの条件を、彼はブログで以下のように綴っている。

名義は変更して契約し直すこと

花の木の看板は降ろして新しいお店にすること

うちの母のスタイルは忘れて自分たちのやりたいスタイルでやること

母の残っていた荷物は私が持っていくもの以外は、選んでいないものは処分すること。

(The good waves)

この条件をもとに、花の木時代の考え方やお客さんたち、私の祖母自身と彼女が作り上げた空間に対する尊敬の気持ちを持ちながらも、より現代社会に寄り添ったスタイルに雰囲気を変え、2018年の5月にお店をオープンさせ、以前とは違った客層が増えた。父はHALOという店の設立と店で働くメンバーたちに少なからず関係していたので、私の成人と同時にその場所に私を連れてきてくれたのだ。初めてその場所に足を踏み入れた時に私は彼らの考え方や言葉、お店の雰囲気などその空間にあるもの全てに魅了され、2020年の1月よりそこでアルバイトとして働き始めることになった。今までゴールデン街に対して少なからず恐れを抱いていた一人の若者が、面白い縁によってその魅力的でカオスな街に出会ったのである。私は、祖母が元々立っていた空間で働き始めることをきっかけに自分のルーツに触れる機会が増え、祖母の存在に今までになかった程興味を持つようになった。花の木時代からの常連さんもいまだに通ってくれるHALOでは、私の知らない「バーのママ」としての祖母の姿を知る人物から話を聞く環境が整えられていた。彼らから話を聞けば聞くほど、祖母の立ち振る舞いや考え方、内には見せていなかった顔を覗き見ることができるようになった。それをきっかけに、祖母のことを良く知る自分の父に話を聞くようになった。そして祖母のことを知れば知るほど、彼女があな空間でお客さんに与えてきたパワーを知ることになる。HALOという場所で働くことが自分の中で印象的であるのは、今まで経験したどんな仕事よりも相手との距離が近く、会ったことのある回数や年齢にかかわらず、うまく言葉を使って対話していかななくてはいけないということはもちろん、祖母の思いが残る空間で働いているからだと思う。

しかし、コロナ禍初頭にカウンターの内側に立って自分と価値観の違う人々と交流するようになったことで、私は自分の性格の中の一部にあるどうしても好きになれない部分が気になってしまうようになった。私の中にある、どうしても好きになれない一部の性格を列挙す

る。見栄っ張りで完璧主義；言われたことを気にしすぎる；喜怒哀楽を強く感じた時には涙を止めることができないうらい自分の感受性に敏感；周囲からの言葉をネガティブな方向に捉えてしまう。自分のそのような不愉快な部分に焦点を当てて「嫌だな」と感じるようになったのは2020年の6月頃からであると認識していて、それはその3ヶ月前からコロナ禍で外出ができなくなり、授業もオンラインになってしまい、家族以外との直接の対話がほとんど失われてしまったこと、6月からHALOの営業が再開し、突然多くのお客さんたちと対話をする環境に身を置くようになった反動が大きかったからだと考える。私は見栄っ張りの性格のせいで、本心や本音を聞かれた時に相手が求めている回答をしてしまうし、良い格好をしたくなってしまいます。お店で出会ったお客さんだけではなく、たとえば家族や友人からこのようなことを聞かれた時でさえ彼らとの心の底の思いの丈をぶつける対話を避けてしまう。突然たくさんの人と対話をする中で、人との距離感の掴み方がわからなくなってしまい、疲れてしまったのだ。2020年の9月頃、これが原因で鬱のような症状が出てしまい大学の相談室でカウンセリングを受ける決断をした時でさえも自分の見え方を気にしてしまい、自分の正直な気持ちを伝えることができなかった。自分の性格のことを意識し始めて、中学生から大学2年生までの過去の自分を振り返ったときに、無意識的に自分の持つネガティブな一面が感情や言動を支配していた場面が何度もあったことに気がついた。しかし、2020年の6月になって初めて、「私は私の性格が嫌いだ」ということに気がついたのだ。先ほども述べたように、私が働いているバーは私の祖母のゆかりがある場所なのでお客さんの多くはお店の歴史や私が彼女の孫であることを知っている。それに加えて祖母が離婚した私の父方の祖父は、直木賞を受賞した作家であった。それ故に私の血筋を知っているお客さんたちから、時に期待の言葉をかけられる。しかしそれがプレッシャーとなり、ナイフのように私の心に突き刺さってしまった。お店に立ち、自分がこの場所で働いている経緯や自分の血縁について話をすると、一定数のお客さんにこのように褒め言葉として、「夏生ちゃんは、お爺ちゃんとお婆ちゃんのサラブレッドだね」というようなことを言われた。『三省堂国語辞典 第八版』、『角川 国語大辞典』によると、このサラブレッドと言う表現は比喩として人間に対してどちらも②の意味で使われることがある。

サラブレッド【thoroughbred=純血種の(馬)】①イギリス産の馬にアラビア系の馬を交配した、すぐれた競馬の馬。②家柄のいい〈人／もの〉のたとえ。「業界の一」(『三省堂国語辞典 第八版』, pp.585-586)

サラブレッド《thoroughbred》①イギリス産、世界最優秀の競走馬の一種。イギリス在来種にアラブ系の馬の交配によるとも、純粋な在来種の改良したものともいう。体格優美で足が速い。②転じて、血統・由緒・家柄の優れた人のたとえ。(『角川 国語大辞典』, p845)

はじめは、この言葉を聞くのが好きだった。今は亡き祖父母の血を引き継いで生きているということで褒められるのに悪い気はしなかった。しかし、2度目にその様な表現をされたときに「ちょっと嫌かも」という感情を覚え、3度目にその言葉で私を形容された時、言わ

れたことに対して全く喜びを感じないどころか、自分の存在価値が否定されたような、ただただ自分の上にプレッシャーが重くのしかかったような気持ちになった。彼らが誉めているのは私ではなくて、私の祖父母だということに気がついてしまったのだ。私がいくら上手な接客をしようと、良い表現をしようと、それは全て「血縁のおかげ」という言葉で片づけられてしまうのだと感じた。その言葉を発した人は私を誉めるつもりで言ってくれたと推測できるが、その言葉が結局自分の嫌な部分に注目してしまう原因の一つになってしまったのだ。

しかし私は、留学経験をしてから HALO に戻ったことで自分の性格を俯瞰的に見ることができるようになり、自分の性格を「嫌だ」と思わなくなった。前の段落でも述べたが私は、「見栄っ張り完璧主義；言われたことを気にしすぎる；喜怒哀楽を強く感じた時には涙を止めることができないくらい自分の感受性に敏感；周囲からの言葉をネガティブな方向に捉えてしまう」という、自分の性格の中に好きになれない部分がある。このような自分の性格のせいで、うまく自分の本心を曝け出すことができないというのは、今でも変わらない。特に怒りと悲しみに対する感情は顕著であるが、誰かと対話をしている時に自分の中で決めている「精神の安寧を保ちながら心を開く限界値」を超えてしまうと、その途端に涙が止まらなくなって会話がままならなくなってしまふ。そのような状態になると、それに対して大抵の人は面倒臭そうな表情を浮かべるか、「何も泣くことないじゃないか」や「泣けば許してもらえんと思ってるのか」と言う。それだけではなく、私は自分の思っていることを話して否定されてしまうことが怖い。常に完璧な自分ではないといけないという思いが強く、少しでも自分の中で納得がいかない部分があると、それを他の人に見られないように隠してしまう。留学前は、こんな私が HALO のような自分とお客さんとの距離が約 50cm しかないカウンター越しに、14 席しかない空間で、他人とも友人とも言えない関係の人たちと感情をむき出しに語り合うことは、向いていないのではないかと何度も考えた。「サラブレッド」と言われて落ち込んだのはほんの一例に過ぎないが、お客さんが良かれと思って言ってくれたセリフが自分にナイフの様に突き刺さって、夜寝る前にボロボロ泣いたこともある。しかし、フランス留学で初めて一人暮らしをし、留学中に就職活動で自己分析をし、帰国後 HALO で働き始めた後に自分の性格を俯瞰的に見つめることで、私はどうにかしてその中の嫌な部分を変えてみようとするようになった。結局 23 年間一緒に過ごしてきた自分の性格は容易に変えることができないという結論を導き出したが、それと同時に、自分の性格と向き合ったことで少しずつではあるが自分の性格との付き合い方がわかってくるようになった。もちろん誰に対しても無理して自分の全てを曝け出す必要は無いし、精神的なパーソナルスペースを定めるのは必要だと思う。ただ、勇気を振り絞って踏み込んだ会話をする中で、自分の人生に必要な情報やヒントを思いがけず得ることができるようになってきた。そしてわからないことを素直にわからないと言って、馬鹿にしてくるような人は居ないし、もし居たらその人とは距離を置けばいいだけなので、他の人たちとの関わり合いにあまり気張りすぎなくても良いということに気がついた。留学経験を経て、自分の嫌な性格と対峙し、あのカウンターに立って自分の性格を見つめ直したことで、自分との付き合い方が分かるようになってきたのだ。

私が比較され、私のアイデンティティと性格について考えるきっかけの一つとなった祖母は、勇敢な女性だったということを HALO で働き始めてから知ることになった。祖母の生前、私は彼女が持つ顔の一部でしかない「祖母」としての一面しか見たことがなかった。祖母はとても上品な人で、子供ながらに敬語を使わず会話をするに躊躇があったことを覚えている。それ故に、祖母の生前に一对一で深い会話をした記憶はなく、彼女の考え方や生き方について興味を持つことはなかった。高校生までの私は、祖母が一人で暮らしていることに対して疑問を持つことがなかったし、彼女が働いているゴールデン街という存在に興味を示したこともなかったし、作家である祖父と一度は結婚していた事実を理解していなかった。そのような祖母の姿に着目するようになったのは、祖母に縁のある場所で働き始めてから、現在もお店に通ってくださる花の木時代の常連さんたちと会話をする機会が与えられたことがきっかけである。彼らは皆一様に、こちらから聞かずとも嬉しそうな顔をして祖母との思い出を語ってくれる。みんな口を揃えて、「あなたのおばあちゃんはほんとにすごい人だった。俺は何度も叱られたよ。」と言う。作家、出版関係、ジャーナリスト、政治家などが多く訪れる場所で仕事をしていた彼女は、仕事前に必ず全ての新聞に目を通してどんな話題にも精通していてどのような仕事に就いているお客さんとも毎日熱い議論を交わしていたと、常連さんが教えてくれた。花の木時代の常連さんだった方に言われた言葉が、すごく印象に残っている。

お客さんが酔っ払ってお店の雰囲気壊すならば、彼女はその人の職業がなんであろうと常連さんであろうと構わず追い出した。だけど、その次に彼らに会った時には、何事もなかったかのように彼らを受け入れていた。

ここで注目したいのは、どんな人に対しても叱ることができるということだけではなく、叱られたお客さんがまた来てくれるということだと思う。それほどまでに彼女はお客さんの本質を見ているし、彼らに対して物おじせず自分の考えを言うことができ、信頼関係を築きあげている。彼女の言葉には、人を惹きつけるパワーが込められていたのだと感じる。私が彼女の勇敢さに気がついたのは、2021年8月から2022年6月までフランスに留学をして、自分の意見を恐れずに述べるようになるまでからだ。政治や文化に対して自分の思うままに意見を述べるということ、1年間フランスのストラスブールに滞在し、議論好きなフランス人学生たちに混じって、意見交換せざるを得ない環境に身を置いたことでやっと身につけることができた。しかし祖母はそれを、日本にいながら身につけた。一人の女性として、日本の内側からの視点で男性が多いお客さん相手に議論を交わすことができるということから、彼女の仕事と家族を守ることに對する覚悟を感じ取ることができる。同じ女性として同じ場所に立ち当時のお客さんたちに話を聞くことで、祖母の勇ましさと逞しさを知ることになった。

祖母はバーの経営者としてはもちろんジャーナリストとしても活動し、言葉だけではなく自ら信念のために行動を起こすことができる人物であった。その姿を知ることによって彼女に対する尊敬の念がより高まった。祖母が1975年に出版した単行本の文庫版、『証言記録

従軍慰安婦・看護婦』(広田, 新人物文庫, 2009年)の著者紹介によると、ゴールデン街で働く前の祖母は、福岡の八幡製鉄株式会社に勤務し、その後週刊誌記者として活動し、1975年には従軍慰安婦問題を描く本を出版したと記載されている。週刊新潮の電子版記事によると、花の木の「オープンは1973年」(デイリー新潮, 2018年2月3日)で、同記事に掲載された私の父のコメントによると、その年は私の父の『父(作家の故・佐木隆三氏)と離婚して2年後』であると記されている(デイリー新潮, 2018年2月3日)。祖母は子供を持つ身でありながら、夜の間はお店のカウンターに立ち、その傍らに慰安婦問題に関する書籍を発行したのだ。立命館大学大学院先端総合学術研究科の村上は1970年代の日本の時代背景と働く女性像について、この様に述べている。

戦後日本においては、「主婦であること」が、「女の幸せ」の度合いを測る指標から、未解放状態にある女の「遅れている」度合いを測る指標へと、価値転換させられる流れが徐々に醸成されてきた。そのせめぎあいのピークにあったのが、1970年代である。(村上, 2009, p.44)

祖母がバーを開店させ、慰安婦問題を取り上げた本を出版した1970年代というのは、「ウーマンリブ運動の展開(1970年10月以降)や、『女性の自立』を促す『国際婦人年』(1975年)理念の拡張」(村上, 2009, p.44)が繰り広げられたような、女性の権利を得るための活動が繰り広げられている時代であった。祖母はそんな時代背景の中、先陣を切って女性の強さを世間に見せつけていたように思える。従軍慰安婦・看護婦たちにインタビューをして作り上げた作品、『証言記録 従軍慰安婦・看護婦』(広田, 新人物文庫, 2009年)の巻末のまとめで、従軍慰安婦問題が起こるのを防ぐための彼女自身の思いとして、「いちばん犠牲になりやすい弱い人たちに強くなってもらわなければならない。」と述べている(広田, 1975, p.347)。祖母は女性が権利を獲得しようとする時代に生きている女性たちに向けて、自分が先頭に立って「女性は弱い」という固定概念を崩そうと行動を起こしていた。祖母は「弱い人」である従軍慰安婦・看護婦たちにスポットライトを当てた文章を世に出し、実際に行動を起こして問題を提唱している。そんな彼女の言葉には信頼感があり、祖母のような「何か思うことがあるなら動く」人物になることが、今の私自身の目標である。

祖母と同様に私のアイデンティティの再考に大きな影響を及ぼした祖父に関する記憶は驚くほど綺麗なものしか残っておらず、「友達に自慢できる親族」という存在であった。私にとって祖父は、夏休みになると4人家族で会いに行く、北九州の門司の山の奥の、トトロが出そうなお家に住んでいる、「なんかすごい小説家のお爺ちゃん」だった。祖父は、自分が住んでいた家に「風林山房」という名をつけていて、週刊ポストの記事に「元は割烹だった和風家屋を周囲の山林共々買い求めて改装し、贅沢に窓を取った各室からは書齋にいても寝室にいても海が望める」(週刊ポスト 2012年5月4・11日号)と掲載されているように、実際に部屋から門司港を見晴らすことができる美しい場所であった。今でも祖父の家から見た、関門海峡花火大会の花火の景色を覚えている。普段は会えないからこそ、祖父は私の夏の風物詩として深く記憶に残っている。その頃の私は祖父の表面的な、「どうやら直木賞を

受賞したすごい人らしい」という華々しい面しか知らなかった。2015年、私が高校1年生になってから初めての夏休み、いつものように祖父の家に遊びに行った。その時は母と妹は一緒ではなく、私と父だけだった。祖父は朝から日本酒を飲み、お昼に料亭で足が痛いと暴れていて、地元の雑誌に寄稿する文章の締め切りに追われていた。初めて彼の華々しくない部分に触れたので、この時の出来事は鮮明に頭に染み付いている。祖父と話していた時、「お爺ちゃん是我的自慢のお爺ちゃんだよ。お爺ちゃんのこと、みんなに自慢しているよ。」と伝えた。祖父の喜んでくれた姿が、私の記憶に残っている。その2ヶ月後の10月31日、彼は亡くなった。死因は下咽頭癌と呼ばれる喉の癌であった。当時の私は何度聞いてもよくわからなかったし、覚えられない難しい名前だった。彼が亡くなる1週間前の10月24日、私と家族4人で一度だけ入院先にお見舞いに行った。ベッドに寝たきりで、弱々しくて、色々な機械に繋がれていた祖父とはもう会話はできなかった。その時私が何と声をかけたのかは全く覚えていない。ただ、病室を後にする直前、「お爺ちゃん、じゃあね!」と言って手を振ったことだけは鮮明に覚えている。するとずっと弱々しく寝ていただけの彼は、私のその言葉に大きく手を振ってくれた。最後の力を振り絞って、と言う表現がふさわしい程、彼がその時に出せる全力だったのだと感じた。病室を出た後、私は全力で泣いた。これが、私の持つ祖父についての記憶と彼との思い出である。彼が亡くなった約1ヶ月後の2015年11月20日、祖父の地元北九州市の雑誌『雲のうえ』第23号に寄稿した手記の中で、祖父はこのようにことを語っている。「夏休みに、遊びに来た孫と写真を撮った時、私のことを自慢のおじいちゃんと言ってくれました。嬉しいものです」(佐木, p19)。これは先ほど記述した2015年の夏休みに私が何気なく発した言葉で、それが彼の遺作に掲載されたのだ。私はこの文を読んで、祖父の純粋な「嬉しい」という言葉に嬉しいという気持ちを抱いたことを覚えている。自分の言葉が祖父に少なからず影響を与えられたことが、何よりも喜びになったのである。これらのエピソードからも見てとれるように、私は祖父について、作家として成功していて身近で一番すごい人という認識しか持っていなかった。

しかしHALOとの出会いから芋づる式に祖父に関する情報を知ることから、彼の、大切なものを手放しても執筆活動を続ける、悪く言えば自由奔放、良く言えば自分の意志をやり通す姿を知ることになった。まず気になったのは、祖父母の関係である。祖父母が離婚していたという事実に興味を持ったのも最近で、それまでは「東京にいるおばあちゃん」「北九州のおじいちゃん」という全くの別物として認識していたので、二人の接点を考えたことがなかった。彼らの関係について祖父母の息子である父に話を聞くと、以下のことを語ってくれた。

息子2人(私の父と叔父)が生まれたのに(私の)おじいちゃんは仕事を辞めて作家になることを決めた。直木賞を受賞する前だったから、お金がなくて息子2人を育てるためにおばあちゃんはおじいちゃんと別れたよ。

父にこのようなことを言われて初めて、私は祖父母の間に接点があったということを知った。私の父は祖母に育てられ、祖父はその後別の女性と再婚し、その後その女性とも離婚

したということ、祖父のお葬式の後に関かされた。そのことについて祖父は週刊ポストのインタビューで、以下のようなことを述べている。

私は18歳で入った八幡製鉄を27歳の時に辞め、30歳で東京に出て38歳で直木賞を受賞し、以来馬車馬のように働いてきた。せめて60歳過ぎたら故郷で暮らしたいと、九州に骨を埋める覚悟で帰った私に、彼女は『東京のあなたと結婚したのであって九州の人と結婚したつもりはない』と別居しました。(佐木, 2012)

祖父が祖母と彼らの子供たちを手放してまで続けたかった執筆活動は、どんなものだったのだろうか。初めて祖父の文章を読んだとき私は、「おじいちゃんはこんなに堅い文章を書くのか」と思った。祖父の公に見せる真面目な姿を目の当たりにしたことがなかったので、私の知っている「優しいおじいちゃん」がこのような本を書くということがとにかく衝撃的であったのだ。祖父の業績について、NHK人物録で以下のように紹介されている。

実際に起きた犯罪をテーマに、小説やルポルタージュを数多く発表。「人はなぜ犯罪を犯すのか」裁判で浮かび上がる事実を基に犯罪者の闇に迫り、ノンフィクション・ノベルという新しい分野を確立した。(NHK人物録)

祖父は、「自らを裁判傍聴業と称した」(NHK人物録)ほど裁判所に通い詰めて殺人という凶悪犯罪を犯した人々にスポットライトを当てた文章を書き、それを世の中に発表することで殺人犯たちの生い立ちや彼らのような存在を作り上げてしまった社会に対する疑問を投げかけていた。祖父が取材した殺人者たちを回想して著した回顧録である『私が出会った殺人者たち』のまえがきで祖父は殺人者達のことを、「日常の陰の隣人たち」(佐木, 2012, p2)と形容している。彼はNHK人物録において、「犯罪は人間の闇の部分だと思う 私にとって闇は何かを学ぶ場であり何かを教えてくれるものである」(佐木)と述べているが、『私が出会った殺人者たち』の帯にあるように「40数年」間殺人者たちと交流してきたからこそ、一歩間違えれば殺人者を擁護していると捉えかねられない言葉に重みが出ているように感じる。どんなに極悪非道な殺人者でも彼らの中には殺人を犯してしまうまでの物語があり、誰もそうならない社会を作るためにできるだけ彼らから彼らの歴史を学ぶべきであるということ、自ら取材をし、作品を世に出すことで世間に問いかけていた。私は彼の著書約110冊を全て読了しているわけではないが、読み終えた一部作品では、殺人者をモデルにした主人公たちに、不思議と感情移入してしまう瞬間がある。私は、祖父が伝えたかった「誰もが彼らになり得る」という思いは、祖父の本を読むことで人々に伝わらると思う。私が知っていた優しくて自由な祖父は、実は多くの殺人者たちと対話をしてきた情熱に溢れた作家であったということに、祖父の死後HALOで働くようになったことで知ることになった。

そして面白いことに、私が当初卒業論文で扱う予定だった作品の著者 Viet Thanh Nguyen が、私の祖母と同じように弱い立場の人たちに焦点を当てていて、そして彼が『The Sympathizer』の主人公を通して「日常の陰の隣人たち」(佐木, 2012)を取り上げているという接点に気

がついた。まず前者に関して、『The Sympathizer』は小説（フィクション）であるが、私は作者の Nguyen 自身が難民としてアメリカに亡命した経験がこの小説の基盤になっていると考える。彼は『The Displaced』という難民作家 18 人の物語を描いた作品集のまえがきにおいて、“I keep my tattered memories of being a refugee close to me. I cultivate that feeling of what it was to be a refugee” (Nguyen, 2018, p17)（「自分が難民だったときの古い記憶を肌身離さず持っている。難民だった時の感覚を自分の中に育てている。」）と述べている。これは『The Sympathizer』の第一章から第三章まで 54 ページ (kindle 版) (ハヤカワ・ミステリ文庫版では 76 ページ) に渡って、主人公がヴェトナム戦争終盤の母国の様子、サイゴンが陥落し、脱出するための飛行機が母国を飛び立つところまでの様子を告白文で詳細に書き記していることから見てとれる。Nguyen 自身 “I remember nothing of the experience that turned me into a refugee.” (Nguyen, 2018, 11)（「自分が難民になったときの経験を何も思い出せない」）と述べているが、それと同時に “a writer is supposed to go where it hurts, and because a writer needs to know what it feels like to be an other.” (Nguyen, 2018, 17)（「作家とは痛みあるところへと向かうべきものであり、よそ者であることがどういう感覚かを知っている必要がある」）ということを話している。Nguyen は、自身が難民になった瞬間のことを覚えてはいないと語っているが、『The Sympathizer』では主人公の脱出するシーンを通して、実際に人間が難民になってしまう瞬間を綿密に描いている。これは私の祖母が「強い人間が弱い人間をいたわったり、慰めたりするだけではけっして差別はなくなる。」と考えていたことと同じ発想である。Nguyen は自身が難民であったことをなかつたことにしようとはせず、同じ経験を持つ者として弱い立場にいる人たちの状況を文字に残している。次に後者に関して、『The Sympathizer』の名前のない主人公は、フランス人のカトリック司祭の父と彼のメイドのヴェトナム人の母のもとに生まれたハーフかつ私生児であり、南ヴェトナムに潜り込む共産主義のスパイであり、ヴェトナムに生まれてアメリカに渡った移民である。そんな彼がアメリカに渡ったのちに、スパイとして仕えている将軍に言われるがまま、何の罪もない資本主義側の少佐をスパイに仕立て上げて彼を銃殺した。その後彼は、自分の恋人と浮気をしたヴェトナム人記者をも殺害した。彼の告白文の中に、亡霊となった彼らの姿が度々登場し、彼に話しかけ嘲笑っている。彼は自らの性格を “My weakness for sympathizing with others” (The Sympathizer, p.48, Kindle 版.)（「他人に同情しがちな私の弱み」）と述べている。彼は自身の性格が故に自分が殺害した相手にも同情し彼らに亡霊となって付き纏われているように感じてしまっているのだと思う。彼はその性格を、“I credit my gentle mother with teaching me the idea that blurring the lines between us and them can be a worthy behavior.” (The Sympathizer (p.48). Kindle 版.)（「『我々』と『彼ら』の境界線をぼやかすことが価値のある振る舞いだという考えは、優しい母親によって植えつけられた」）という母親の考えに起因していると考えている。彼は殺人者ではあるが、私には 100 パーセント悪者だとは思えない。それは彼の生まれ持った環境や母に植え付けられた考え、全てのことが因果となりこの結果になってしまったこと、そして彼の相手に同情してしまう性格が理由である。この主人公は、まさに祖父が述べた「日常の陰の隣人たち」(佐木, 2012, p2) であり、生まれてから染みついた性格やアイデンティティの良し悪しに関係なく、誰もが一步道を踏み外せば簡単に殺人者になってしまうことを体現してい

る。私は Nguyen の小説に影響されて自らの告白文を祖父母の血縁を基軸に書くことになったが、その過程で彼らの思いと Nguyen の思いや生い立ちがリンクしていると知ることになったのが、単なる偶然だとは言いたくはない。

自分の手記を書くことで主人公の出自とアイデンティティに関する葛藤が私のそれと重なる部分があることに気がつき、主人公の手記の存在で自分の葛藤を客観視することができた。もちろん彼と私の悩みは違い、彼は周囲の人々から“A bastard” (The Sympathizer, p.27, Kindle 版.) (「妾の子」)として卑下される血縁を持つのに対して私は「サラブレッド」という賞賛されるような血縁を持つ。いわば対極にあるような言葉であるが、どちらも直系尊属の2人が印象的な血縁を持っているからかけられる言葉であるという点で共通している。妾の子という言葉はどこを切り取っても悪口だとしか捉えられないが、私の場合は、定義通りであれば褒め言葉として捉えられる言葉である。それにも関わらず、なぜネガティブに捉えてしまうのかということ、この手記で文字に起こすことで、自身のその当時の思いを見つめ直すことができた。この言葉に対して嫌な思いを抱いたのは、「『サラブレッド』と発したお客さんたちは私を通した祖父母の姿しか見ていないのではないか」と思ってしまったからである。その時私は、自身の存在が透明人間になってしまったかのように感じ、私個人の存在価値に疑問を抱いてしまったのである。もちろん祖母に縁のある場所で、花の木時代のお客さんたちが私の姿を見て目に涙を溜めて「おばあちゃんの面影がある」と言ってくださることは純粋に嬉しいし、この光景を祖母に見せてあげたいと思う。文学に興味のあるお客さんたちに祖父のことを褒められ、「おじいちゃんの血が流れているのだから、文章を書いてみなさい」と言われることは、期待をしてくれるようで嬉しい。しかし私は「サラブレッド」という言葉によって、自分の価値が祖父母の価値と比較され、それがよりも小さいものだと言われているように捉えてしまい、悲しさを覚えたのだ。私は、祖父母が生前行っていた人間の弱い部分にスポットライトを当てて世間に問いかけるという活動を行なっているわけでもないし、いまだに彼らのような自分の信念を見つけられていない。それゆえに、「自分は何もできていない」という情けなさ自覚していたのだ。しかし私は、この文章を書くことで「自分は祖父母ではない」という当たり前のことにやっと気がついた。彼らと同じ血が流れていても、それは私のほんの一部に過ぎない。「サラブレッド」と言われることで自分の全存在価値を否定されたように感じて落ち込んでしまったが、祖母の縁ある場所で、祖母のことを知っているお客さんたちがいる環境で働いていれば、祖父母のルーツだけ目立つというのは当たり前である。そこで見せている私の姿は私は私の全てじゃなくて、HALO という場所でしか出すことのない私の一つのペルソナにすぎないのだ。ふと、花の木時代の常連さんに言われた言葉を思い出した。「ママに息子がいるってことを知ったのは、ママが亡くなってからだよ。孫がいたなんて信じられないよ」。祖母はその空間で、家族とは切り離れた「花の木のママ」というお店の中だけの一面を持っていた。確かに私は祖母の生前、バーのママらしい姿の祖母を目にしたことはなかった。けれどわたしは彼女とは違い、家族とは切り離さない姿の私でその場所に立っている。私と祖母は別人なので、そこに立つ時の気持ちも接客スタイルも全く違って当たり前である。あくまでも、彼らと自分の間には境界線があるので、そこをあやふやにする必要はない。そう思ったことで、自分が抱えてい

たモヤモヤがスッと晴れたようだった。私は、自分の告白文を書いている最中に『The Sympathizer』を読み直すことで、それ以前に読んだ時よりも自分のアイデンティティと向き合えるようになったのである。

私はこの手記を書くことで、言葉がもたらす影響というのは、捉える人次第でいくらでも変化するということを、私の祖父母と作家の Viet Thanh Nguyen と彼の作品を絡めながら記述してきた。まず初めの段落で、HALO の歴史とお店の持つ祖母との関係を説明し、次の2つの段落では私が HALO で働くことで感じるようになった葛藤と自分の性格に対する考え方の成長までの経緯を描いた。その後、バーのママとして働いた祖母の功績と、女性ジャーナリストとして活動をし、強い女性であろうとしていた祖母の姿を、彼女の作品の言葉を引用して説明した。そして次に、私が知っていた内側に見せる祖父の姿と、私の知らなかった外側に見せる情熱的な作家としての祖父の姿を、彼の作品と言葉を紹介しながら記述した。その後、自ら難民としての生い立ちを持ち、同じ立場から難民たちにスポットライトを当てている Nguyen と祖母の共通点、そして彼のフィクション小説『The Sympathizer』の主人公と私の祖父の取材対象者たちとの共通点を紹介した。そして最後に、私が手記を書くきっかけを与えてくれた『The Sympathizer』の主人公の出自とアイデンティティに対する葛藤が私の境遇と共通し、私が自分のアイデンティティを客観的に見るきっかけを作ってくれたことを説明した。私はこの3人のことを、「言葉の魔法使い」だと思っている。それは私が祖母の縁がある場所で、祖父母の「サラブレッド」という言葉によってネガティブな反応を起こしてしまったけれど、そこから立ち直り自分の性格を嫌いではなくなったのは、Nguyen が生み出した『The Sympathizer』の主人公の告白文を読んだおかげであり、そして自らの手記を書き上げるためにさまざまな調査を行い、祖父母が文字を介して自らの信念を世間に拡散していた事実からパワーを得たからである。3者は確実に、言葉を通して他者に影響を与えていることを自ら実感した。今はまだ、私には自分の言葉で誰かを魔法にかけられる力はないが、この手記を経て成長して自分らしく振る舞うことで、これからの人生において少しでも誰かにパワーを与えられる存在に成れるよう努力を惜しまない人間でありたい。

参考文献

- NHK アーカイブス . あの人に会いたい . NHK. https://www2.nhk.or.jp/archives/jinbutsu/detail.cgi?das_id=D0009250458_00000. (参照 : 2022 年 12 月 11 日).
- Nguyen, Viet Thanh. *Nothing Ever Dies*. The United States of America, Little, Brown Book Group, 2017. Kindle 版 .
- Nguyen, Viet Thanh. *The Displaced*. The United States of America, Abrams Press, 2018.
- Nguyen, Viet Thanh. *The Displaced*. The United States of America, Abrams Press, 2018. (山田文 (訳) (2019). 『ザ・ディスプレイスト』. 株式会社ポプラ社.)
- Nguyen, Viet Thanh. *The Refugees*. The United States of America, Grove Press, 2017.
- Nguyen, Viet Thanh. *The Sympathizer*. The United States of America, Atlantic Monthly Press, 2015.
- Nguyen, Viet Thanh. *The Sympathizer*. The United States of America, Atlantic Monthly Press, 2015.

- (上岡伸雄 (訳) (2017). 『シンパサイザー (上) (下)』. ハヤカワ・ミステリ文庫. Kindle 版)
- The good waves. 『HALO episode1』. note. https://note.com/seitaya0607/n/nf6505726ca80?magazine_key=ma447588683b9. (参照: 2022 年 12 月 20 日).
- The good waves. 『HALO episode6』. note. https://note.com/seitaya0607/n/nlee72527300b?magazine_key=ma447588683b9. (参照: 2023 年 1 月 2 日).
- 金城希伊子. 『女性労働の 60 年 —仕事と子育ての両立を目指して—』. 現代社会研究科論集. http://repo.kyoto-wu.ac.jp/dspace/bitstream/11173/225/1/0140_001_006.pdf. (参照: 2022 年 12 月 11 日). pp.94-96.
- 佐木隆三. わたしの青春. 『雲のうえ 第 23 号 特集 世界文化遺産登録記念 北九州の製鉄所』. 2015 年 11 月 20 日. pp.18-19.
- 佐木隆三. 『私が出会った殺人者たち』. 株式会社新潮社. 2012 年 2 月 15 日発行.
- 佐木隆三. 『私が出会った殺人者たち』. 株式会社新潮社. 2012 年 2 月 15 日発行. 帯より.
- 週刊ポスト 2012 年 5 月 4・11 日号「作家佐木隆三氏 74 歳で老老離婚し現在は故郷でひとり暮らし」. 週刊ポスト. https://www.news-postseven.com/archives/20120427_104394.html?DETAIL. (参照: 2023 年 1 月 4 日).
- 新宿ゴールデン街商業組合、新宿三光商店街振興組合. 『戦後の歴史と風俗に育まれた、新宿ゴールデン街の飲み屋文化 新宿ゴールデン街の物語』. Google Arts & Culture. https://artsandculture.google.com/story/WAXxlmkjSQH_Jg?e=StellaAccess&hl=ja. (参照: 2023 年 1 月 3 日).
- 高山文彦. 『【佐木隆三さん追悼】』. 朝日新聞デジタル. <http://www.asahi.com/area/aichi/articles/MTW20151118240550001.html>. (参照: 2023 年 1 月 4 日).
- 広田和子. 『証言記録 従軍慰安婦・看護婦』. 新人物往来社. 2009 年 8 月 7 日発行.
- 松本藍果. 「覚悟を決めて一生懸命生きれば幸せ by 『花の木』 広田和子」. 松本藍果の日記. Goo ブログ. <https://blog.goo.ne.jp/sukinatabemonohaicecream/e/e3177b17f7f77a885bb9796e40371367>. (参照: 2022 年 12 月 11 日).
- 村上潔. 2009 年. 「1970 年代の女性当事者たちによる『主婦的状况』をめぐる問題提起 —主に東京都国立市公民館における実践の記録から—」. 立命館人間科学研究. <https://core.ac.uk/download/pdf/60527937.pdf>. (参照: 2023 年 1 月 4 日).
- 「サラブレッド」. 見坊豪紀, 市川孝, 飛田良文, 山崎誠, 飯間浩明, 塩田雄大, 『三省堂国語辞典 第八版』. 株式会社三省堂, 2022 年, pp585-586.
- 「サラブレッド」. 時枝誠記, 吉田精一. 『角川 国語大辞典』. 株式会社角川書店, 1982 年, p845.